

海士で感じたこと

荒川 祐行

僕は「おきひやく」という企画を赤嶺教授の授業で知った。「聞き書き」とか本の編集・出版なんかは当時の僕にはどうでもよく、ただ孤島に行けることに魅力を感じ、授業中に参加の意を表すメールを送ったのを今でも覚えている。そして、その日が近づく中で、海士に行けるワクワク感と、知り合いのいない中で数日過ごすことや未知なる「聞き書き」を行うこと、そして、何より現地へ到着できるのかということへの不安でいっぱいであった。しかし、ことは思った以上に順調に進んでいった。巡の環のスタッフの方たちをはじめ、名古屋市立大や一橋大、そして現地の人々のおかげで自分は与えられたモノを受け取り、ただ消化するだけでよかった。とても居心地が良かった。食事や移動の際の会話では自分が知らなかった話を聞けて、とても勉強になった。その一方で、これから自分は何をして行こうか分からなくなった気がする。また、自分は海士に来る前に読んだ本の影響で、資本主義経済に支配されながら貨幣を稼ぎ、人やモノを貨幣で価値をつけることに対して疑問や不安を抱き、地方で第一次・第二次産業に従事して、自分でモノを創出し、共同体でコミュニケーションをとりながら、生活できたら、幸福感や満足感は安定するのかなと思っていた。しかし、その典型である海士に来て感じたのは、ここでも貨幣に縛られている面はあるのかということだった。それは、町の財政や買ったときや燃料代高騰による漁師の減少等で町の存続というのは左右されているということである。その一方で、米の生産や隠岐牛のブランド化、教育の縦の連携等の充実化などは今後の海士の発展にとっても重要であると思った。そして、何より人と人のつながりが強いと思った。それは店の中や道端で感じられた。ただ、まだ上っ面の知識しかないので、もっと学びたいと思った。

では、本題の「聞き書き」はどうであったかという、田中久夫さんの生涯に関して十分に聴けたと思っている。確かに、田中さんの人生を余すことなく聞けたかという、それはあり得ないが、決められた枠の中では十分濃い話が聴けたと思う。これからの編集にプレッシャーがかかるほどである。また、ベタ起こしで思ったのは、人間は、思った以上に人の話を聞いていないということだった。まだ、「聞き」の部分しか行っていないに等しい状況であるが、取材時以上にまだ田中さんから学ぶことができそうなのでワクワクしている。

最後に、序盤に言ったが自分は今回与えられたモノをこなすのに必死であったが、来年自分がまた参加できる機会があるのなら、経験者として、「おきひやく」のため、そして自分の成長のために、先頭に立ってみんなを引っ張り、周囲に影響を与えることを密かに夢見ている。

海士に臨む

今井 里香

今回、「おきひやく」プロジェクトに参加し、様々なことを初めて経験した。本格的なフィールドワーク、初対面の方に対する聞き書き、他大学と合同での実習であることなど、何から何まで未知のことばかりだった。海や離島というのは普段の生活からかけ離れた環境であり、その中で数日間を過ごすことに対する漠然とした不安もあった。しかし、実際に訪れてみた海士には、想像していた以上に澄んだ海とともに、自分の地元を思い起こさせるような山道や田んぼなど田舎特有の景色が広がり、思っていたよりも親しみを感じた。そのような場所で、土地と人や、人と人のつながりの濃さを肌で感じながら様々な人と交流することで、とても充実した、楽しい時間を過ごすことができた。本当に参加することができてよかったと思う。

聞き書きとして田中久夫さんにお話を伺った際は、田中さんの経験や物事の考え方など多岐に渡る事柄についてお聞きすることができて、人生の参考になる教訓を得ることができた。そのお話の幅広さから、事前のごくわずかな情報から単純な予想をしていたことを恥じるほど、田中さんが歩んでこられた人生の奥深さを感じることとなった。もちろん、今回私が知ることができたのは海士や田中さんのごく一部でしかないのだが、その一部だけでも直に触れることができたのは本当に貴重な体験となった。

自分自身に立ち返るということについても考えさせられた。物事をどう考えるかということから自分がどんな見方をしているのかを知る、と言葉で言うのは簡単だが、それが実際にどういうことなのか、今まではあまり実感がわかなかった。今回の実習を通して、どのようなことに興味を持ち、大事だと思うのか、それをどう表現するのかというのが自分を表すことになるのではないかと思うようになった。一緒に参加した一橋大の学生や、先生方や名古屋市立大学のみなさん、応援団の方々、巡の環や聞き書きの語り手さんをはじめとする海士の方々から、そうした考え方を学ばせてもらったと思う。見たり聞いたりして得たことを自分に重ね合わせて考えるためには、主体的に学ぶ姿勢が必要なのだということも感じた。自分に足りていなかったのは、まさにその主体的な姿勢だと思う。これから、自分が感じたことを中心に文章を編集することで、自分の感じ方がそのまま反映されていくことは恐れ多くもあり、楽しみでもある。聞き書きも初心者で、これからの編集作業がどうなっていくのか未知のことばかりだが、初めて海士を訪れて得た、沢山の新鮮な驚きと感動を忘れずにいたい。

そして、実際に参加したことにより、「おきひやく」プロジェクトに対する様々な人の強い思いを感じた。そうした人々の尽力により、このプロジェクトは成り立っていることを念頭に置き、私も一参加者として、当事者として意欲的に取り組んでいきたいと思う。

思い込みをくつがえす

遠藤 雅

今回、上田まさこさんに聞き書きをするにあたって、班の中で事前に聞きたいことをある程度、決めて臨んだ。その中に、「議員をやろうと思ったきっかけ」があり、私たちは女性が議員をやるとするには、何か大きな出来事や強い信念があつて、議員という職に就いたのではないかという想像をしていたが、実際上田さんに話を伺うと、そういった大きなきっかけがあつたのではなく、周りの人々の勧めや後押し、ぜひやってほしいという声があつたからだと述べていたことは非常に印象的であつた。婦人会や更生保護の代表を務めるきっかけも周りからの声だと知り、人からやってほしいと頼まれたことを、責任を持ってやり続けていること、またこのように上田さんにやってほしいという人々が多くいることから、上田さんの責任感の強さや周りの方からの信頼の厚さを垣間見たような気がした。それと同時に、話を聞く際に自分がいかに思い込みや先入観にとらわれているかということを感じた。女性が議員という職に就くにはなにか大きな出来事があつたに違いないという思い込みの下で話を伺っていたが、見事にくつがえされ、話を聞かなければわからないことが多くあるのだと、実際に聞き書きをしてみて体で実感することができた。

また学生時代の話では、高校は滋賀の学校に働きながら勉強し、給料はもらえるが帰省の旅費を工面するのは大変で、年に一回ほどしか帰ることができなかつたと聞き、私は一人で遠く離れた地で働きながら勉強して暮らし、年に一回しか親の顔を見ることができないのは心細かっただろうと思っていたが、上田さんは、「いやあんまり、それはない」と述べ、むしろわくわくしていたと知り、非常に驚き、またもや自分の想像をくつがえされた。

約 2 時間、上田さんのお話を伺って、自分の思い込みや想像がくつがえされる場面が多く、だがこれは実際に話を聞かなければ感じることでできないことだし、話を聞きながら多くの発見をできたことが、聞き書きの魅力なのではないかと私なりに実感することができた。今回初めての聞き書きを経験し、「聞き」の部分では、私自身が緊張してしまって、上田さんにもこの緊張を移してしまったことや、最初は相槌を打つことしかできなかったこと、「書き」の部分では、その時の上田さんの表情や語り口調を文字で表すことの難しさなど、多くの反省や問題はあるが、少しでも読者の方々に伝わればと思う。

隠岐の島といえば……？

城 和世人

後鳥羽上皇が島流しにされた場所。もしくは海を渡ろうとしてサメをだましたウサギが皮をはがれるという昔話にちらっと登場する島という説がある。「おきひやく」参加が決まる前にはその程度の知識しか持ちあわせていなかった私でありましたが、海士町、そしてこの「おきひやく」プロジェクトに携わる人々の魅力と多様さ、(それとおいしいサザエにも)に魅せられつづけた6日間でした。

私が聞き書きを行わせていただいた西村坂男さんは島No. 1といわれる漁師の方で、私が隠岐に向かう前に、日々の漁について、漁師生活についてこのようなことを聞いてみたい、こういう質問をすれば何かおもしろいお話を聞かせていただけるのではないだろうか、などと考えていた事柄に対して期待通りのお話をさせていただいたうえに、西村さんが若かったころには、島根本土、鳥取はもちろんのこと、福井や広島、遠くは四国や沖縄からも漁師の人々が魚を獲るために集まっており、そのような人達と漁についての話をしていたことや、遠方からの人達が隠岐に上陸し相撲を取ったり、お酒を飲んだりしていたのだというお話や、西村さんの漁師としてのルーツである、子供の頃に遊び感覚で下級生を引き連れて船にのり港近くで漁をして、それを行商の人に売ること小遣いを稼いでいた子供時代のお話など、私の予想を大きく超えた大変おもしろいお話を聞かせてくださいました。また、島No. 1漁師と言われる西村さんが、お話の中で繰り返し一生懸命に働くこと、努力を続けることの大切さをお話しされていたことが、そろそろ学生生活を終えて社会にでることになる私にはとても印象に残りました。

私が「おきひやく」で得た一番のものはたくさんの人との出会いでした。「おきひやく」をコーディネートしてくださっている巡の環のみなさん、実は隠岐に行くまでそんなに話をする機会がなかった同じ大学からの参加者の皆、今回合同で「おきひやく」に参加した名古屋市立大学の方々、両大学の先生方とそのお2人の声掛けで日本各地から集まられた応援団の方々、たった6日間で私には多くの人との出会いがあり、普段の大学生活で親交のある友人達とは少し、(あるいはとても)違った人達に会うことができ、たくさんのお話、考え方、生き方、振る舞いに触れることができ、少しは私の頭の中も柔らかくなったのではないかと思います。

今年は初年度ということもあり、準備がたりない点ばかりでしたので、来年は万全を期して「おきひやく」に参加させていただきたいと思います。最後になりましたが、お世話になった沢山の方々に改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

だんだん

砂塚 翔太

今回、「おきひやく」に参加して海士で活動する中で常に考えていたのは、このプロジェクトに関わることは海士のためなのか、自分自身のためなのかということだ。NPO法人だんだんの理事長の田中久夫さんの聞き書きをさせていただき、巡の環の方をはじめとした多くの方にお世話になる中で、自分がその人たちに対して何もできていないことに、高慢だと思われるかもしれないが、少なからず違和感を覚えていた。

そうしたことを考えながら、田中さんにお話いただいた内容を何度も聞き、文字起こしていく中で気づいたことがある。田中さんが理事長を務めていらっしゃるNPO法人だんだんの名前の由来は、「感謝」を意味する方言の「だんだん」である。もうひとつの由来は物事が「だんだん」と良くなっていくように、という田中さんの希望である。このお話を伺って、自分の中で何かすとんと胸に落ちるものがあった。今回の「おきひやく」のプロジェクトでは、とにかく学ぶことばかりで海士の方々にお返しできたものはあまりなかったかもしれない。しかし、しっかりと「感謝」をし、自分の中に吸収して力を付け、「だんだん」とお返しをしていけばいいのではないだろうか。

今回の「おきひやく」プロジェクトの成果を、海士にとって、そして自分自身にとっても最大化していくためには、まずは感謝して学び、そしてそれをだんだんとお返ししていかなければいけない。そして今回の『海士伝 3』の出版は、そのお返しの一番最初の段になるだろう。海士の素晴らしさ、そして田中さんの生きてきた歴史が、お話をうかがった時の雰囲気も伴って感じられるようなライフヒストリーを作ることができるように努力していきたい。

そして次のお返しは、『海士伝』が、第4弾、第5弾と100人目までしっかりと続くようにすることだ。一橋大学からの参加は私たちが初めてである。来年以降、一橋大学で「おきひやく」プロジェクトが定着していくかどうかは私たち次第である。

ただ私は今年の9月から1年間海外留学にいくためそのお返しに大きく関わることができない。しかし、留学中も受けた恩に感謝して少しでも力を付け、1年後日本に帰ってきてから、「おきひやく」プロジェクトを通して、そしてそれ以外でも海士に対して少しずつでもお返ししていけるように努めていこうと思う。

今回の「おきひやく」プロジェクトで田中さんから学んだ、「だんだん」の意味を忘れずにこれから過ごしていきたい。そして「だんだん」を実践するために、また海士に行きたいと思う。

自分の人生を「選択」すること、地域で生きるということ

関根 涼

今回の「おきひやく」プロジェクトのような非常に濃密な時間を過ごしても、「こんなことが得られた！」などと意味付けできるのがだいぶ先のことになってしまう性格ですので、この感想ではどんなことを得られたか、ということではなく、実習中に何を感じたかについて中心に書いていきたいと思います。

まず、1つ目として普段自分がぼんやりと考えていたことを再確認できた機会となりました。それはこの期間中にお話していただいた、主にIターンの方たちの姿を見ていて感じたことです。私の印象では、海士町でお会いしたIターンの方たちは、「自分にとってどんな生き方が幸せなのか」ということを考えぬいて、その結果、今の世の中の大多数の人が躊躇する選択、つまり海士への移住をした人たちだと感じました。大学生という否が応でも将来のことをあーだ、こーだと考えなければならない環境の中で、私自身ナイーブではありますが、「高校や大学の多くの先輩方が通ってきた道を選択しなければ、食っていけないんじゃないのか」と心配してみたり、一方で「自分が思うように生きていきたい」と思ったり。そんな中で、海士町で出会ったIターンの人たちは見知らぬ、都会から遠く離れた、四方を海に囲まれた土地で、充実した毎日を送っていらっしゃるように私には映りました。そのことは、来年4月から東京から遠く離れた場所の、規模の小さな企業で働くこととなった私にとって、とても勇気づけられることでした。

そしてもう1つは今回の話し手さん一人ひとりのお話を聞くことで、本来地域というものが一人ひとりの人間の「しごと」によって成り立っているということを教えていただきました。巡の環代表の阿部裕志さんから「自分の生計を立てるための『かせぎ』と、地域を運営していくための『しごと』は違う」という話を伺いました。私が生まれ育った地域はここ20年ほどでできた新興住宅地であるという地域柄か、自分の親やご近所さんが地域のために「しごと」をしているというところをあまり見たことがありませんでした。ある意味、そういったものを極力なくすことができるところも魅力だと感じる人が多いのかもしれない。一方で、話し手さんたちは特別に「地域に貢献しよう」と考えてらっしゃるつもりはないのかもしれませんが、一人ひとりの方が地域にとってなくてはならない存在であり、地域の皆さんに大切な存在だと思われている。私にはそのように映りましたし、何かそのような暮らし方、生き方にとっても心惹かれるものがありました。決して私が生まれ育った地域の人たちを否定するわけではないのですが、私は「かせぎ」に加え、「しごと」を当たり前に行われている話し手さん、海士町の方々にとっても尊敬の念を覚えましたし、私自身もそのような生き方をしていきたいと思いました。

伝えていくこと責任

中本 雄治

私が今回この「聞き書き」の実習に参加したのは赤嶺先生のゼミに属しているためであり、「聞き書き」そのものというよりは海士という土地に行くこと、おいしい料理を食べることなどを楽しみにしていた部分が多い。だが、事前にこの「おきひやく」プロジェクトの先輩にお会いし、このプロジェクトにかけてきた思いや我々への期待を感じることで「自分にできるのだろうか」という不安を感じながら海士へ向かった。

実際に海士に到着し、数日間を過ごしてみると、自然は本当に美しく、現地の人々はみなあたたかく、活力にあふれていることが感じられた。このようなことは事前に本などを通してイメージは持っていたのだが、やはり実際に体験するのとでは感じ方がまるで違うと感じた。

「聞き書き」の方はといえば、我々のグループはみな初の「聞き書き」ということで緊張していたのだが、話し手の方は大変気さくな方であり、終始楽しんでお話を聞くことができた。その中でも印象的だったのが「私のような人がここにいたということを忘れないでください」という言葉であった。事前のワークショップなどでも知らされていたように海士のように限られた地域内ではそれぞれ認識のある人が多く、うわさが広まるのも早い。そのような中で、今回のように自身の生い立ちや経験、考えを話すということはどれほどの意味を持つのかということを考えさせられた。

まだ私たちの「おきひやく」プロジェクトは「聞き書き」の「聞き」の部分が終わりにすぎない。私たちはこの「おきひやく」を先輩方から引き継いでおり、話し手の方が話していただいたことを読者に「正しく」伝えていかなければならないという責任があり、今はそれに対する不安を抱えているが、語り手の方の言葉を忘れずに次の「書き」の作業に取り組んでいきたいと思う。

私自身、今回この「おきひやく」プロジェクトに参加し、本当に多くのことを体験し、様々なものを得られたように思う。その中で、わたしたちが本を出版するということが海士にどれほどの恩返しをすることができるのかはわからない。だが、できるだけ多くの「恩」を返していけるように今後の活動を行っていきたい。

最後に、今回の「聞き書き」の成功は巡の環の方々のサポートなしでは決してありえなかった。天候によるものなどさまざまなアクシデントがありながら最後まで手厚くサポートしていただいた巡の環の方々には本当に感謝している。

海士町で「生きる」ということ

松浦 輝

今回私がこの実習に参加しようと思ったのは、「直感」によるものが大きかった。赤嶺先生から授業の中で「おきひやく」プロジェクトについての話を聞き、興味を持った。最初は、「島に行く」「話を聞く」という程度の理解ではあったが、実際にその詳細を聞き、海士町へ行く日が近づくにつれて、20年にもわたって行う「おきひやく」プロジェクトのスケール感、海士町に住む人々の「声」を伝えることの責任の大きさを実感していった。当初は「直感」だったものの、来年から社会人として働くことを控えている私が、ゼミの垣根を越えてこのプロジェクトに参加する、自分なりの意味を考えた。就職活動を通して、自分が「どう働くか」ということは散々考えてきたわけだが、働くことと密接な関係にあるはずの「どう生きるか」という視点は欠如していたように思えた。そこで今回の実習を、自分としては、これからの「生き方」について考える時間と位置付け、参加していくことにした。

海士町で生きている方々からは、「信念」のようなものを感じた。この島で何かを成し遂げようという「信念」である。お話を伺わせていただいた上田まさこさんは、たくさんの人に囲まれて生きているような方だった。数多くの活動を組織の先頭に立ってされているが、その多くは人から頼まれたことによって始め、現在もやっているものだという。たくさんの方が物事を任せたいと思うほどの信頼を得ている上田さんの人柄もさることながら、自分発ではない活動を快く引き受け、全力で取り組む上田さんからは、海士町をよりよい町にしたいという「信念」を感じた。その他にも滞在中に、様々な立場の方々と会ったが、「どうしてここで?」、「なぜこれを?」という質問に生き活きと答えていらっしやう。いずれも揺るがない「信念」をもって海士町で生き、働いている方々であったように思える。

このような海士町の方々にとって仕事は手段であり、何かしらの生き方をすることが目的であるような印象を持った。生き方を目的としているからこそ、揺るがない「信念」が生まれるように思えた。一方で、私は仕事に就くことを目的としていて、生きているうちに何かを絶対にしたいと思ったこともなかったと気付かされた。就職活動を終えた今、漠然と感じていたフワフワした気持ちは、そのことと関係があるのかもしれない。このままだと、自分は会社の一員として、大きな流れに身を任せて生きていくことになってしまうように思え、このように「信念」をもって生きる姿に憧れを感じた。しかし、海士町の方々が「信念」を獲得するにあたっては、数えきれないほどの経験をしてきたはずだ。そのため、私が今すぐに何か成し遂げたいことを見つけることは容易ではないだろう。それでも、この実習を通して、何らかの形で、人生をかけて取り組んでいけることを見つけようとする意識は持つことはできた。海士町で暮らす強い方々の生き方に触れることができたことは私の貴重な体験である。

少しでも「海士」を伝えられたら

向山 杏奈

1つのエピソードから振り返りたいと思います。

最終日のワークショップにて、聞き書きの「聞き」の部分を終えるにあたって、一人ひとり感想を述べました。私は聞き書きに対して自分が心がけたり、感じたりしたことを発表するうえで、「人の話をきく」ということを強調しました。小さい頃から人の話を聞くことが苦手だった私が人の話を聞くことに専念したこと、また日常ではここまで、誰かの話を、文字通り一字一句聞き漏らすまいとしたこと、どれも当プロジェクトに参加しなければ下手すれば一生経験することのなかったような経験をしたからです。

このように文字で書くと、とても月並みな感想にしか見えないのですが、ワークショップで私がこのことを強調した時は、もう少し人身に響くようなものがあつたかと思います。今ここで、聞き書きのなんたるかを記そう、というわけではないのですが、このように、自分の言葉でさえ、音声で発されたことばを再び文字であらわした時に、同じような影響を持ったまま人に伝えるのはとても困難です。困難ですが、私たちは、語り手さんに語ってもらったお話を、ただ正確に伝えるだけでなく、語り手さんたちの、お話していただいた時の表情、声音、そんなものまでもが、じんわりと文字からしみだしてくるようなかたちで、本を手にとってくださることになるみなさんへ、どうかしてお届けしたいと強く思いました。海士の外からやってきた私たちにとって、海士の土地、海士の人、海士を包み込む雰囲気、何か強くひきつけられるものがあつたという事実を、顔の見えない人、長いスパンで想像するならば、まだ生まれてもいない未来の人にまで、伝えることのできる可能性があり、その可能性が私たちの手にゆだねられている、ということはこのプロジェクトに参加している誰もが胸が震えるような感慨を持っているのではないかと思います。その感慨を、海士をよく知る方にも、これから海士を知ろうという方にも、伝えたい、そう思わせてくれた「海士」のメッセンジャーになれば、と思います。

「部外者」として

山本 晃平

「人と人とのつながり」、「人と地域とのつながり」。最近よく見かけるつながりを強調した言葉だが、私はこのような言葉に対して否定的であった。生まれてこの方、ずっと都会暮らしの私にとって地域に住む人々の密接な関わりあいというものを感じてこなかったということもあるだろうが、そもそもつながりという言葉が曖昧過ぎるということがあると思う。何をもってつながりというのか、どんなときにつながりを感じるのか、なにからなにまで曖昧で、それゆえ逆に使い勝手のよい“便利な”言葉ぐらいにしか考えてこなかった。しかし、海士の人々は違った。道行く人のほとんどが知り合い同士で、車の中からも挨拶しあうような距離の近さ。見知らぬ私たちにさえ言葉をかけてくれる地元の人々。島の危機（人口減少や財政危機等）に際して、地域が一体となってUターンやIターンを受け入れて島を盛り上げようとする姿勢。そこには確かに海士の人々のつながりを感じることができた。これが地域で一体になることなのかと肌で感じることもできた。

今回の聞き書きでは私は島No. 1漁師の西村坂男さんのお話を伺った。聞き書きをするにあたって、事前から疑問に思っていたことがある。聞き手である私たちはあくまで「部外者」でしかないということである。普段、海士と別段関わりなく過ごしている都会の学生が、突然ほいっと海士にやってきてお話を聞いて、「この人はこんな人です」としてしまって本当によいのかという思いがあった。それで本当にその人の生き方について思いを汲み取れるのかという懸念もあった。しかし、実際に聞き書きした後に行った報告会でその懸念は解消された。というのも、西村さんに限らず様々な人の聞き書きの発表に対する感想として、「あの人がそんな人だとは知らなかった」といった声が島の人々のあいだからあがったのである。聞き手である私たちが「部外者」であったからこそ話すことができた話もあるかもしれない。聞き手が部外者であることの是非についてこの場で簡単に結論を出すことはできないが、島の人々も驚くような語り手の生きざまを映し出すことができた、という点においては“よい”聞き書きができたのではないかと思うところである。

「おきひやく 2014」によって、私の中の価値観は間違いなく変化した。局所的な事実である個人史を汲み取るにすぎないとして聞き書きという手法そのものに否定的であった私が、こうして嬉々として「おきひやく」体験記を書いているからである。「その人がどう生き、どう考えたか」という話からはいろいろな考えるべき話題を見つけることができる。それ以上に聞き書きは面白い。それを感じることができたのが今回の「おきひやく」の最大の収穫であるだろう。

海士町での6日間

横田 莉絵子

今回、私は赤嶺先生のゼミからではなく先生の授業からの参加でした。このプロジェクトに参加するまで海士町の存在は知りませんでした。フェリーで本土から約3時間もかかる離島での生活は、私達が普段見知っている本土での生活とは全く違ったものでした。また、人口流出の問題も深刻ですが、それに対する取り組みは各所で取り上げられるほど注目されており、島をこの目で見ることを楽しみにしていました。

人の語ったことを文字で記録し本として出すことは面白そうだなと、どちらかといえば編集の方に興味を持って参加を決めた私は、聞き書きの「聞く」ことの難しさ、奥深さを知らず、合宿早々にそれを痛感しました。私は意見の発信を盛んに行う環境にあまり身を置いたことはなく、自分の考えたこと、話者さんのことを皆に伝えることなどをして、他の大勢にわかってもらえるように情報を発信することの大事さを学びました。また、この「おきひやく」で色々な人と出会って6日間を過ごしたことは刺激的で、濃い6日間でした。名古屋市立大の方々、応援団の方々、話者さん方、Iターンの方々、それぞれの考えや生き方に触れて、思うことが沢山ありました。

今回、私たちの班がお話を伺った上田まさこさんは、非常に様々な活動に取り組んでこられた方であり、地域での信頼も厚い方でした。上田さんは、自分の故郷である海士町の未来を案じ、古いやり方に必ずしもこだわらず良い方へ良い方へ進むように考えて活動を進められていました。海士町の勢いの回復は、このような方々がいらっしゃったからなのだなと感じました。

聞き書きは、その人の人生に触れて生き様を知ろうとします。そこで一人の人の生き方を見つめることは自分の生き方を見つめることにもなります。聞き書きの作業は非常に骨が折れる作業ですが、同時にやりがいもあるものだという身を染みて感じています。今回、初めて名古屋市立大と一橋大合同での「おきひやく」プロジェクトの実施となり、二校の距離は離れておりますが、最終的に一つの出来上がりを楽しみに、編集作業に努めていきたいと思っています。

最後になりますが、この「おきひやく」プロジェクトに関わった全ての人々に感謝申し上げます。